

牛久：学校周辺に見る自然

第4号 牛久自然観察の森

2021年4月6日発行

< 春の訪れ ～④昆虫 >

みなさん、こんにちは。春の牛久自然観察の森。最後に、昆虫のなかまの紹介です。



アブラナかふんの花粉やみつをなめるシマハナアブ（上2枚）と、ビロードツリアブ（左下）。

ばいりん おく
梅林の奥にある畑では、アブラナにたくさんのハナアブるい類やハエのなかまが来ていました。その大部分は体が大きくミツバチと間違えられることも多いシマハナアブで、その他にナミハナアブまちがやツマグロキンバエ、ビロードツリアブなども見られました。



ハコベかふんの花粉やみつをなめるナミホシヒラタアブ（上2枚）と、アシブトハナアブ（左下）。

小さなハコベの花にも、小さなヒラタアブのなかまが来ていました。多いのはナミホシヒラタアブで、他にはホソヒラタアブや体の大きなアシブトハナアブもいました。ハナアブるい類の口は「なめる口」で、長くのばすことができます。また、2つの複眼ふくがんの間が離れているのがメスで、せまいのがオスです。



ヒメオドリコソウの蜜を吸う、ニッポンヒゲナガハナバチ（日本髭長花蜂）のオス。



ヒメオドリコソウには、針のような毛が生えたセスジハリバエもいました。成虫は花の蜜や花粉をなめますが、幼虫はふ化すると、チョウやガの幼虫に寄生するそうです。

ヒメオドリコソウでは、ずいぶんと触角の長いハチが蜜を吸っていました。これはオスでメスはもっと短いのですが、名前はニッポンヒゲナガハナバチ（日本髭長花蜂）といいます。生きものの名前はこのように、その特徴からつけられたものが結構あります。皆さんも、名前の分からない生きものがいたら、その特徴から自分で仮の名前をつけてしまいましょう。特徴が分かれば、あとで本当の名前が分かることもありますよ。

セスジハリバエ（幼虫はチョウ類の幼虫に寄生する）。

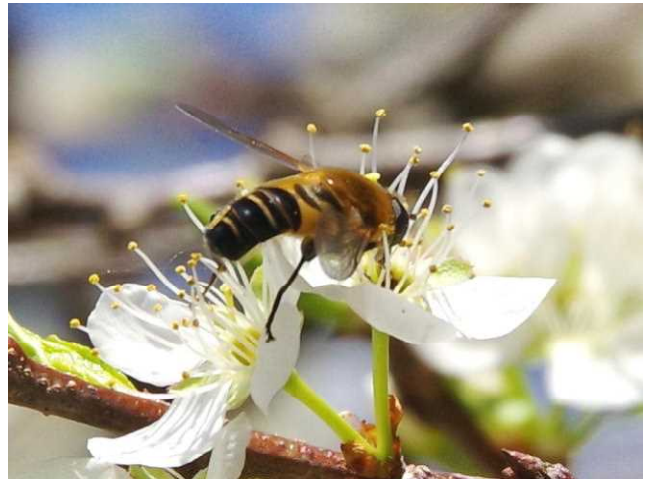


タチツボスミレの蜜を吸う、ピロードツリアブ。右の写真は交尾で、左側の複眼がくっついているのがオス。

タチツボスミレが群れく中を、花から花へ移りながら、蜜を吸ってまわる虫がいました。全身毛むくじゃらで、ホバリングしながら長い口先をのぼして蜜を吸う姿は、まるでハチドリのようなようです。英語では「ビーフライ（ハチのようなハエのなかま）」とよばれているようで、ミツバチとまちがえる人もいます。でも、よく見ると羽は2枚。複眼が大きく触角は短いですね。そう、ハエに近いなかまなのです。日本での名前は、ピロードツリアブ。春にしか現れません。成虫は蜜や花粉を食べますが、幼虫は、ヒメハナバチのなかまの幼虫やさなぎに寄生するそうです。



オオイヌノフグリの蜜や花粉をなめるハエ (左)。 アオキの蜜や花粉をなめに来たハエ (中)。
クサイチゴの花粉や蜜をなめるアシトハナアブ (右)



ウメの花に来て、花粉をなめたり (左) 蜜をなめたりするアシトハナアブ (右)。

その他、オオイヌノフグリやクサイチゴ、ウメ、アオキなどにもいろいろなハナアブ類やハエが来ていました。



最後に、目の前を何かがフワッと横切ったと思ったら、成虫 越冬のホソミオツネトンボでした。腹の先に産卵管があるので、メスですね。この冬はあまり多く見かけませんでしたが、どのくらい冬を越せたのでしょうか。

【理科支援員：宮内】

アオキの枝にとまるホソミオツネトンボと、その拡大 (右)。